



性教育 まずは知ることから

第53回県学童保育研究集会

岩手県学童保育連絡協議会主催の第53回岩手県学童保育研究集会は11月27日にオンラインで開催され、岩手県の学童保育の保護者、指導員ら333人が参加しました。

午前は全体講演が行われ、中京大学非常勤講師の玉木博章氏が「性教育を考えよう～現代における多様性とその生涯発達～」をテーマに講演。玉木氏は「性教育は人権教育でもある。子どもだけでなく、大人にも教育が必要だ」と指摘。男女二分法の考え方を変えていかなければならないとし、「例えば、学童保育でキャンプをする時に、男子は薪拾い、女子は調理などと分けてしまっていないか」と述べ、無意識のうちに、多様な性の排除や性別による役割分業をしていないかと投げかけました。

また、データを示しながら性被害の多くは身近なところで起きていると説明。事例を上げながら、被害者が声を上げることの難しさを語り、「皆さんの周りで大変な思いをしている人がいたら、力になってあげてほしい」と話しました。そして、今私たちができることとして「性教育の範囲は広い。まずは知ることから始めてほしい。それが誰かを助けることになり、巡り巡って自分にもつながってくる」と伝えました。

聴講した菓子学童保育クラブ第二の保護者齊藤和代さんは「性教育は生教育、生きていくための教育でもあることを学んだ。とても勉強になった」と理解を深めていました。

午後は、5つのテーマで分科会が行われました。第3分科会「学童保育のあそび～今、大切にしたいこと」には、21人が参加。菓子学童保育クラブ第一の主濱由希子指導員がほいく誌（2022年7月号）に掲載された自身の実践記録を解説。主濱指導員は子どもたちと本気で遊び、共感が生まれていく過程を語り、「遊びの中で子どもたちのふとした言葉に、子ども理解を深めるヒントが隠されている」と述べました。また、助言者として参加した福島県の福島市の川村綾子指導員は「忙しく短い放課後。宿題等に追われた子どもたちに学童保育は何を保障していけるか？」と参加者に問いかけ、「他愛ないおしゃべりなども、遊びのひとつ。そうとらえると大切な時間」と述べ、子どもたちの「あそび」を広くとらえ、受け止めることの意義を語りました。分科会の後半は参加者が、子どもたちのあそびの様子を交流。参加者は互いの発表を聞き、コロナ禍の子どもたちにとって、「あそびきれる、あそび」や、「人とつながる楽しさを感じられるあそび」が大切であることを共有しました。

第5分科会「学童っ子の親としての思い」には15人が参加。県連協役員（保護者・保護者OB）3人によるミニ講座の後、参加者の交流が行われました。事前アンケートで保護者から寄せられた、「発達に特性のある子どもが学童保育でどのように過ごしているか」という疑問について、世話人を務めた指導員は「子どもたちのほうが、大人より柔軟に対応していることもある。私たち指導員は、子ども同士の意志の疎通が難しいときに通訳者になれるよう心がけている」と話しました。



「性教育は広範囲である。まずは知ることから始めてほしい」と語る玉木博章講師